就学前後期における不登校傾向への関連要因

：保育士・教師とのコミュニケーションとの関連

○出野美那子¹・山形伸二²・藤澤啓子³・鈴木国威⁴・高橋雄介⁵・安藤寿康³

(¹武蔵野大学通信教育部・²大学入試センター・³慶應義塾大学文学部・

⁴大阪人間科学大学人間科学部・⁵京都大学高等教育研究開発推進センター)

キーワード：不登校傾向，保育士・教師とのコミュニケーション，就学準備性

The causal factors of school refusal among preschool and early school children.

Minako DENO¹, Shinji Y AMAGATA², Keiko K. FUJISAWA³, Kunitake SUZUKI⁴, Yusuke TAKAHASHI⁵, and Juko ANDO³

(¹Musashino University, ²National Center for University Entrance Examinations, ³Keio University, ⁴Osaka University of Human Sciences, ⁵Kyoto University)

Key Words: School refusal, communication between parents and teachers, school readiness

目 的

近年、小学1年生の学校不適応が問題視されており、保幼小の連携の必要性が叫ばれている。海外の研究では、学校不適応への影響要因として、社会統計学的背景をはじめとして、知的能力、認知的能力、社会的スキル、養育者との関係など多岐にわたる検討がなされており、幼児期から、発達段階に応じた就学準備性の重要性が認識されている (Hair et al., 2006)。一方、本邦では事例研究が中心であり、発達心理学的観点から保幼小連携の方法を検討した研究は少ない。そのため、本邦の文化的背景、教育制度に沿った就学準備性を検討していくことが必要であると思われる。

本研究ではその端緒として、学校不適応として登園／登校しづりを取り上げ、就学前に小学校に親しんだ機会 (小学校との接触)、親にとっての保育士・教師とのコミュニケーションの助かり度合いとの関連を検討することを目的とする。

方 法

調査参加者 インタネット調査会社モニターのうち、調査時点において5歳～6歳の就学前児(年長)または小学校1年生の子どもを持つ母親3927名(就学前:男子895名,女子977名,就学後:男子1003名,女子1052名)。

測定 問題行動の測定には Strength and Difficulty Questionnaire (Goodman, 2000) を用いた。信頼性係数は、 $\alpha = .65$ であった。登園／登校しづり傾向の測定には学校ざらい感情測定尺度 (古市, 1991) に、身体愁訴に関する項目を加えたものを用いた。因子分析の結果、学校ネガティブ感情、学校ポジティブ感情、身体化症状の3因子が得られた。信頼性係数は、各 $\alpha = .89, .87, .80$ であり、尺度合計については $\alpha = .91$ であった。子どもの QOL の測定には、QOL 尺度 (Bullunger, 1994; 柴田, 2003) を使用した。信頼性係数は、 $\alpha = .59-.88$ であった。

子どもと親個人の要因として、生活の規則性、子ども／親の気質 (BIS/BAS)、子／親の社会的接触を尋ねた。保育園などの通所施設・小学校との接触の内容として、就学前に小学校に親しんだ機会 (小学校との接触)、親にとっての保育士・教師とのコミュニケーションの助かり度合いについて尋ねた。この他、家庭背景変数として父母の学歴と就労の有無、世帯収入、子にかかる費用を尋ねた。

分析 独立変数間の相関分析、および階層的重回帰分析を行った。以下の各階層について強制投入を行った。第1階層：家庭背景、第2階層：子どもと親の心理的要因、第3階層：就学前の通所施設での親の活動、小学校との接触の内容、第4階層：保育士・教師とのコミュニケーションの内容・配慮。

結 果

結果より、就学前に小学校との交流行事に参加していること、親が保育士・教師に配慮されており助かっていると感じている程、子どもの登園／登校しづり傾向が低くなっている

ことが明らかとなった。

Table 1 重回帰分析結果 (数字は標準偏回帰係数)

	登園／登校しづり傾向		QOL	
	就学前	就学後	就学前	就学後
Step1 性別	.00	-.03	.01	.00
母学歴	.05	-.02	.00	.00
父学歴	-.06	.02	.01	.06 *
年収	-.01	.03	.03	-.02
子にかかる費用の割合	-.03	-.01	.03	.00
Step2 生活規則性	-.14 ***	-.15 ***	.13 ***	.12 ***
子どもの気質 (BIS)	.22 ***	.33 ***	-.38 ***	-.42 ***
子どもの気質 (BAS)	-.11 ***	-.09 **	.20 ***	.19 ***
親気質 (BIS)	-.03	-.06 *	-.09 **	-.05
社会的接触 (子)	.02	-.10 ***	.04	.13 ***
社会的接触 (親)	-.14 ***	-.06 *	.14 ***	.08 **
Step3 就学前のPTA活動	-.05	.02	.05 *	-.04
就学後のPTA活動		-.03		.01
クラスに友の有無		.04		-.01
小との接触 (園の行事)		-.03		.02
小との接触 (交流行事)		-.08 *		.01
小との接触 (きょうだい)		-.01		.10 ***
小との接触 (その他)		-.05		.02
小との接触 (全くない)		-.06		-.01
子育て機関利用	-.02	.02	-.02	-.05 *
Step4 保育士・教師とのコミュニケーション内容の助かり度	-.06	.01	.04	.05
保育士・教師とのコミュニケーション配慮の有無	.03	.03	-.03	-.03
保育士・教師とのコミュニケーション配慮の助かり度	-.13 *	-.18 ***	.13 **	.13 **
R^2 (家庭背景のみ)	.01 ns	.00 ns	.01 ns	.01 ns
ΔR^2 (全変数)	.13 ***	.21 ***	.30 ***	.35 ***

* $p < .05$, ** $p < .01$, *** $p < .001$

考 察

小学校との接触の内容に加え、親と保育士・教師との質的關係が子どもの登園／登校しづりに関連していることが明らかとなった。今後は縦断的に、子どもの認知／社会的能力との関連についても検討が必要である。

引用文献

- Bullunger, M. KINDL. (1994). A questionnaire for health-related quality of life assessment in children. *Zeitschrift fur Gesundheits psychologie*, 1, 64-77.
- 古市裕一 (1991). 小・中学生の学校ざらい感情とその規定要因 カウンセリング研究, 24, 23-27.
- Goodman, R. (1997). The Strengths and Difficulties Questionnaire: A research note. *Journal of Child Psychology and Psychiatry*, 38, 581-586.
- Hair, E., Halle, T., Terry-Humen, E., Bridget, L., Calkins, J. (2006). Children's school readiness in the ECLS-K: Predictions to academic, health, and social outcomes in first grade. *Early Childhood Research Quarterly*, 21, 431-454.
- 柴田玲子. (2003). 「小学生版 QOL 尺度」の標準化にむけて. 主任研究者渡邊修一郎. 健やか親子 21 推進のための学校における思春期の心の問題に関する相談システムモデルの構築. 平成 15 年度厚生労働科学研究 (子ども家庭総合研究事業) 報告書 (第 7/11). 21-43.